

志太開発地域

国土調査課
保存用

土地分類基本調査

静岡・住吉

5万分の1

国土調査

静岡県

1973

序 文

国土は、将来にわたってかけがえのない生活の場であり、生産の基盤であります。この限られた国土の開発整備ならびに保全を合理的な土地利用計画のもとにすすめるため、国土の実態を把握する必要があります。

さいわい国において大規模開発プロジェクト地域の土地条件を明らかにするため、昭和46年度より国土調査法に基づく開発地域土地分類基本調査が制度化されました。

本県は従来から「中部圏開発整備法」に基づく都市開発区域・工業特別地区の開発・また保全区域の整備を進めている段階でこれに的確に対処するため、昭和46年度より順次土地分類調査を実施することになり、すでに縮尺5万分の1「浜松」「掛川」「御前崎」の各図葉について調査し成果も利用されている。

今回は静岡・住吉図葉について調査を実施しました。

本地域は県中部地域の広域圏開発計画が策定され、多彩な開発整備がすすめられています。

この図葉は行政上に利用されることはもちろん広く関係者に利用されることを希望しますとともに資料の収集調査、図簿の作成に協力いただきました関係各位に深く謝意を表します。

静岡県農地部長 白石正夫

ま え が き

- 1 本調査の事業主体は静岡県であり、経済企画庁総合開発局国土調査課の指導をえて実施したものである。
- 2 本調査の成果は国土調査法施行令第2条第1項第4号の2の規定による土地分類基本調査図および土地分類基本調査簿である。
- 3 調査の実施、成果の作成機関および関係担当者は下記のとおりである。

	総合企画調整編集	静岡県農地部農地企画課	課長	山崎 弘二朗
			主幹	鈴木 讓
			技術吏員	白井 春雄
地形調査		静岡大学教育学部	教授	松本 繁樹
		静岡英和女学院短期大学	助教授	北川 光雄
		国立沼津工業高等専門学校	講師	浅黄谷 剛寛
表層地質調査		静岡大学理学部	教授	土 隆 一
			助教授	黒田 直
土 壤 図		静岡大学農学部	教授	加藤 芳朗
		東京農工大学	助教授	浜田 竜之介
		静岡県農業試験場	主任研究員	近藤 鳴雄
		“ 林業 ”	研究主幹	鈴木 正
		“ ”	主任研究員	梶 富美夫
土地利用現況図		静岡県農林水産部林政課	主 査	勝山 勲
		“ ”		白井 直方
		静岡県農業試験場	主任研究員	近藤 鳴雄
		駒沢大学		竹村 利夫
利水現況図		静岡県農地部農地企画課	技術吏員	白井 春雄
	協 力	東京農工大学	教授	黒部 隆
		駒沢大学	助教授	長沼 信夫

目 次

序 文

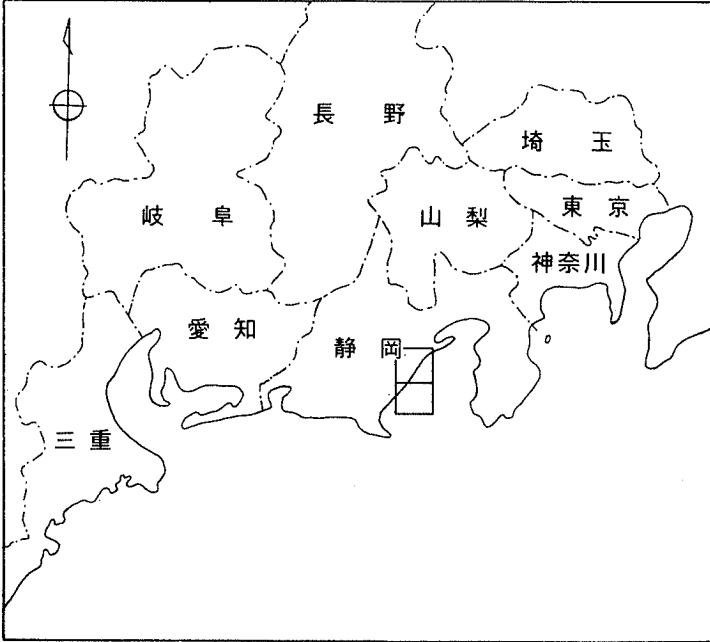
総 論

I 行政区画	1
II 人 口	2
III 図葉内の地域の特性	2
IV 主要産業の概要	3
V 開発の現状とその方向	3

各 論

I 地形分類図	7
II 表層地質図	18
III 土 壤 図	21
IV 傾斜区分図	27
V 水系・谷密度図	28
VI 利水現況図	30
VII 土地利用図	31

位置図



総

論

1 行政区画

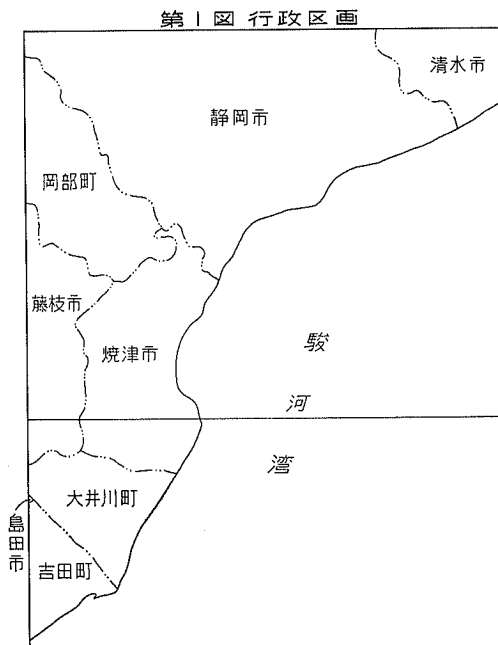
1 位置

「静岡・住吉」図葉は静岡県の中央部に位置し、経緯度は 東経 $138^{\circ}15' \sim 138^{\circ}30'$ 、北緯 $34^{\circ}40' \sim 35^{\circ}00'$ である。

図葉内面積約 845km^2 であり、このうち陸地面積約 318km^2 、海面面積約 527km^2 である。

2 行政区画

「静岡・住吉」図葉の行政区画は、静岡市、清水市、焼津市、藤枝市、島田市、岡部町、大井川町、吉田町の 5 市 3 町である。



島田市については図葉内に占める面積が小さいので以下説明を省略する

「掛川・御前崎」を参照

Ⅱ 人 口

第1表 世帯数, 人口

市町村名			静岡市	清水市	焼津市	藤枝市	岡部町	大井川町	吉田町	備 考
区分										
昭和 40年	人 口	男	182,025	109,461	37,654	34,365	4,886	8,376	8,949	
		女	185,680	109,098	39,354	36,424	5,068	8,210	9,537	
		計(A)	367,705	218,559	77,008	70,789	9,954	16,586	18,486	
	世帯総数		87,557	50,530	16,469	14,420	1,855	3,143	3,756	
昭和 45年	人 口	男	205,629	117,553	40,293	38,100	4,919	8,414	9,324	
		女	210,749	117,413	42,444	40,650	5,118	8,398	9,917	
		計(B)	416,378	234,966	82,737	78,750	10,037	16,812	19,241	
	世帯総数		109,349	59,393	19,181	17,629	2,054	3,432	4,078	
40年 45年 の 比較	人 口	男	23,604	8,092	2,639	3,735	33	38	375	
		女	25,069	8,315	3,090	4,226	50	188	380	
		計	48,673	16,407	5,729	7,961	83	226	755	
	世帯総数		21,792	8,863	2,712	3,209	199	289	322	
人口伸び率 B/A			13.2	7.5	7.4	11.2	0.8	1.4	4.1	

(注 国勢調査)

東京、大阪、名古屋などの大都市圏を結ぶ、いわゆる東海道メガロポリスの中心的位置にある本県は、その恵まれた立地条件を反映して、今後においても人口が増加するものと見込まれている。

このように本図葉地域においては県内の他の地域と違い郡部においても都市近郊のためか人口の減少が見られない。

Ⅲ 図葉内の地域の特性

本地域は県都静岡市と清水港を持つ清水市、それに遠洋漁業の拠点である焼津港を持つ焼津市を中心として商業、工業、農業、漁業地帯を形成している。

また、区域内には日本平と高草山の両山地があり駿河湾に注ぐ安倍川と大井川の両河川

によって形成された静岡平野と志太平野がある。

地域開発に重要な役割を持つ交通は東西を結ぶ国鉄東海道新幹線、国鉄東海道本線、国道1号線、東名高速道路および国道150号線があり、これを主軸に主要地方道、一般県道、市町村道が縦横に貫通している。

また、静岡市と清水市の間に私鉄静岡鉄道電車線があり、輸送の役割をになっている。

観光的には、地区の東側に日本平県立自然公園に指定された風光明媚な日本平と石垣いちご、東照宮の久能山があり、近年東名高速道路の開通を契機に一層発展されつつある。大井川町、吉田町においては近年養鰻業が営なまれ養漁池が目立つ。

本地域の気象の特色は第2表のとおり。

Ⅳ 主要産業の概要

1 農林水産業

水産業…本地区内には、遠洋漁業の拠点である焼津港があり、又大井川河口の両岸では養鰻池が多く存在し鰻の養殖が盛んである。

農 業…他の地区に比べ農地面積が少ないが、本県の特産品であるみかん、お茶は主に安倍川右岸、日本平で生産され、又久能山の海岸側では傾斜地を利用した石垣イチゴが栽培され観光にも一役買っている。

工 業…静岡市を中心にサンダル、木工品等の機械系内陸型工業、清水市においては清水港をバックとした輸入原木による木材・木製品等の工業が盛んである。

商 業…商店数で県下の1位を占める静岡市が中心である。全体的にみた場合、卸売店数は全商店の15%であるが、商品販売額では80%と極めて大きな比重を占めている。

観 光…本地区内には登呂遺跡、県立日本平公園があり、東名高速の開通により一層の発展が期待される。

Ⅴ 開発の現状とその方向

以上のような地域的特性を受け、本地域の開発の現状とその方向として次の点があげられる。

第2表 静 岡 気

要 素	单 位	1 月	2 月	3 月	4 月	5 月	5 月
平 均 気 圧	mb	1011.6	1013.5	1012.3	1014.6	1010.1	1007.7
平 均 気 温	℃	5.6	6.3	9.1	14.3	18.5	21.5
最 高 気 温 (平 均)	〃	11.0	11.5	14.0	18.8	23.0	25.2
気 温 高 極	〃	25.7	24.3	24.0	28.8	33.5	34.3
最 低 気 温 (平 均)	〃	0.4	1.2	4.1	10.1	14.3	18.2
気 温 低 極	〃	-6.6	-5.3	-3.5	-0.5	7.0	12.5
平 均 湿 度	%	54.2	55.9	60.7	69.9	73.4	79.9
湿 度 極 小	〃	10	12	8	15	14	32
平 均 降 水 量	mm	80.6	76.9	159.0	231.3	257.6	395.7
最 大 日 雨 量	〃	61.5	46.0	74.5	103.0	172.3	218.4
降 水 日 数 > 1mm	日	5.1	5.6	8.9	10.9	11.0	13.0
〃 > 10mm	〃	2.1	2.6	5.2	5.9	6.5	8.1
〃 > 30mm	〃	1.0	0.7	1.4	2.6	2.7	3.9
平 均 風 速	%	3.1	3.0	3.2	3.1	2.8	2.6
最 大 風 速	〃	14.5	13.3	13.3	15.0	15.2	14.7
平 均 曇 量	日	3.6	4.7	5.5	7.1	7.4	8.5
日 照 時 間	h	215.5	193.1	207.3	176.4	199.0	147.6
日 照 率	%	68.7	63.1	56.1	45.2	46.0	34.1
快 晴 日 数	日	16.1	10.7	8.7	4.0	3.4	1.4
曇 天 日 数	〃	6.4	8.8	11.4	17.9	18.6	22.3
霧 日 数	〃	0.7	0.6	1.1	1.3	1.7	1.5
雷 電 日 数	〃	0.4	0.1	0.7	0.8	0.8	2.1
霜 日 数	〃	13.0	11.3	6.5	1.1	0	0
結 氷 日 数	〃	15.6	12.8	4.4	0.2	0	0
雪 日 数	〃	—	2	—	—	—	—
積 雪 日 数 < 10cm	〃	—	—	—	—	—	—
〃 ≥ 10cm	〃	—	2	—	—	—	—

- 1 農林水産業としては、農業は従来の生産→出荷のパターンから観光農園的なものに
漁業は数少ない遠洋漁港の一つとしてますます都市の食糧需要に応えるものと思われる
- 2 商工業としては、商業は静岡・清水市の共同事業として流通機構の改善により価格の
安定を目的とした静岡流通センターを建設中である。

なお、他の市町についても、これに対応できる対策が望まれている。工業は零細企業
が多いため共同、協業化と生産の合理化による企業規模拡大、経営の近代化の育成が必
要である。

- 3 観光レクリエーションとしては、農業開発との調和をはかりながら、日本平、久能山
を中心とした地区と発達した交通網を利用し、広く県外からの観光レクリエーションの
拠点とする。

各 論

I 地形分類図

地形の概要

静岡図葉のほぼ中央の北端には、フォッサ・マグナの西縁、すなわち糸魚川—静岡構造線の先端部がのびてきており、これに接してそのすぐ西側にはアルカリ火山岩類の山列すなわち真富士山・竜爪山地の南縁部（賤機山地）が張り出していて、その先端は静岡—焼津間の大崩海岸に終わっている。この山地の東方および南方にはそれぞれ静岡低地、大井川低地が広がっていて、いずれも厚い砂礫質の扇状地部分と軟弱な三角州性の低湿地部分とから成りたっている。前者の静岡低地の東方には、平面形が半円状で、南に急崖を向け、北に緩斜した有度丘陵地があって、その頂部および西・北麓に台地群を発達させている。静岡図葉はこのように、山地、丘陵地、台地、低地の全ての地形単元を含み、しかもそれらが小規模、複雑に入り組んで、いわゆるモザイク状の配列をみせている。

いっぽうの住吉図葉は大井川の河口部に当るもので、陸地の面積そのものも狭いが、地形自体もごく単純で、そのほとんど全てが大井川低地のうちの大井川扇状地とその縁辺部に当る田尻低地で占められている。

〔I〕地形区

両図葉の地形区については、海拔高度・起伏量・谷密度・傾斜分布・地形面の性質・構成物質・地域的なまとまりなどを基準にして、以下のような地形区を設定することができる。

地形区分（静岡・住吉）

I 山地	a 安倍川山地	1 葉梨山地
		2 朝比奈山地
		3 足久保山地
	b 高草山山地	1 高草山山地
2 徳願寺山地		
c 賤機山地		
d 谷津山・八幡山・有東山		
II 丘陵地	有度丘陵地	
III 台地	a	日本平・小鹿台地
	b	国吉田台地

Ⅳ 低 地	a 大井川低地	1 大井川扇状地 2 田尻低地 3 瀬戸川流域低地 4 朝比奈川・葉梨川流域低地 5 朝比奈川上・中流谷底低地 6 坂口谷川低地
	b 静岡低地	1 安倍川扇状地 2 麻機低地 3 高松低地 4 藁科川流域低地 5 丸子川・小坂川低地 6 有度丘陵西・北麓小扇状地
	c 清水低地	1 有度丘陵東麓小扇状地 2 矢部・駒越海岸低地 3 清水砂堆地 4 宮加三臨海埋立地
	d 駿河湾岸砂礫州地	1 釘ヶ浦砂礫州地 2 和田浜・宮島砂礫州地 3 用宗・大浜砂礫州地

〔Ⅱ〕 地形分類

安倍川山地 (Ia)

安倍川山地は静岡圏葉中最大の山地であるが、現実には必従谷の性格を有して北西—南東方向に伸びる朝比奈川、藁科川の谷によって、葉梨山地、朝比奈山地、足久保山地の三つの山塊に分かたれている。地層は一般に古第三系の瀬戸川層群に属する砂岩、頁岩などからなっているが、葉梨山地の南寄りの部分では新第三系の大井川層群に属する砂岩、泥岩で構成されている。

これらの山地は海岸近くに位置していながら、最高点は561mにまで高まるし、傾斜も朝比奈、藁科両河谷にのぞむ谷壁部分は 30° 以上、山地の一般斜面も $20^\circ\sim 30^\circ$ と、かなりの急峻さを示している。起伏量ではその過半が $200\sim 400\text{ m/cm}^2$ の中起伏を示し、朝比奈山地北部の富厚里付近では 400 m/cm^2 以上の大起伏部分すらある。いっぽう 200 m/cm^2 以下の小起伏部分は、先の両河谷沿いに帯状に分布するにすぎないので、山地の末端部と低地との境

界はいわゆる沈降性の地形を呈することになり、山脚間には沖積物で充填されたオボレ谷地形の発達が著しい。

これら山地内の山頂部および山腹の一部には緩斜面の存在していることが多く、周囲の急斜面とは著しい対照をなしている。これら山地を刻む小谷の谷頭部や低地への出口には小規模な崖錐や麓層面の発達があり、その一部は土石流状の堆積物からなっている。

高草山山地 (Ib)

高草山山地は先の安倍川山地の南東に接するもので、両山地は岡部川・丸子川・泉ヶ谷・牧ヶ谷の谷を連ねる線で境される。地質は一部に先の瀬戸川層群・大井川層群の砂岩・頁岩類を含むほかは、その大部分はフォッサ・マグナの西縁沿いに噴出したアルカリ玄武岩などの火山岩類からなっていて、この山列は北へは安倍川を斜断して賤機山―竜爪山―真富士山へと続いている。

この山地は丸子川の谷によって南の高草山山地と北の徳願寺山地とに二分されるが、その最高点はそれぞれ501m (高草山)、376mである。山地斜面の傾斜も一般に20°~40°、この山地が駿河湾に終る大崩海岸では、比高 200m 近くの高蝕崖が連続していて、俗に「東海の親不知」と呼ばれる奇勝をつくりあげている。また起伏量の上でもその大半が 200~400m/km²で、海岸に接していきなり中起伏の堂々たる山地をつくりあげている。

この山地と周囲の低地との境界は、先の安倍川山地の場合によく似ているが、南北の両縁部では、この山地を刻む小河川の一つの小扇状地群の発達が顕著で、その上に載る河川も天井川となっているものが多い。

賤機山地 (Ic)

賤機山地は、フォッサ・マグナの西縁沿いに噴出したアルカリ火山岩類よりなる山列の一部で、南へは安倍川を斜断して先の高草山山地へ、北へは竜爪・真富士山へと続くものである。静岡圏内では両側に30°以上の急斜面をみせる細長い山脚として、南に向かってつき出しているが、この範囲では最高点が160m余りにすぎないため、小起伏山地にくみこまれてしまうことになる。

谷津山・八幡山・有東山 (Id)

谷津山、八幡山、有東山の3つの独立した小山は、静岡低地内に屹立する島状丘陵であり、先の賤機山の山麓線と共に沈降性の地形をよく現わしている。地質は静岡構造線の東側に分布する新第三系の静岡層群の砂岩・泥岩からなり、最高点は谷津山の108m、八幡山

の55m、有東山の30mで、いずれも周囲に30°前後ないしそれ以上の急斜面をもつ小起伏山地である。

有度丘陵地（Ⅱ）

静岡函葉の東寄りに孤立し、駿河湾に急崖を向けた有度丘陵は、初期洪積統の根古屋累層を基底に、それを覆う久能山礫層（層厚60～160m）が主要構成層である。この久能山礫層の堆積面はすでに消失してしまっているが、大井川下流の小笠山礫層、富士川下流の鷺ノ田礫層などに対比されている。日本平面というのはこの丘陵頂から北に広がる緩斜面のことであるが、そのほかこの丘陵の西・北麓には二段の台地状緩斜面の発達があって、小鹿礫層、国吉田礫層で構成されている。ただしここにいる有度丘陵地には、これらの台地面は含まないことにする。久能山礫層と小鹿礫層との間には、一部に草薙泥層（層厚35m+）が存在するが、礫層部分よりも侵蝕が進んでいるため、その部分は高度の一段低い小起伏の丘陵面をなしている。これらの地層はいずれもかつての安倍川の河口堆積物であるが、その後ドーム状の隆起運動によって変位を受け、現在のような地形を形成するにいたったものと考えられている。なおこのドーム状丘陵の南半部は、その後の激しい海蝕によって削り取られてしまい、現在では駿河湾に向けて険しい侵蝕崖を連続させている。

起伏量は南面の急崖部では最高230m/km²にも達するが、ドームの北半面では200m/km²以下、丘陵麓付近では100m/km²以下となるため、これを基準にして丘陵地Ⅰ、Ⅱを区分することができる。斜面の傾斜はⅠでは一般に15°～18°、Ⅱでは8°～3°程度である。

日本平・小鹿台地（Ⅲa）

有度丘陵頂の北向きの緩斜面が日本平面であり、西および北麓の台地状緩斜面上位面が小鹿面であって、両者は共に久能山礫層を不整合に覆う小鹿礫層（層厚20～35m）の堆積面である。この礫層は元来はドーム状に隆起をとげた有度丘陵の表面全体を覆っていたのであるが、隆起後下部に存在する草薙泥層の差別侵蝕によって、中間部のみが削ぎ取られてしまっている。日本平・小鹿面の形成期は、天竜川下流の三方原面、大井川下流の牧ノ原面などと共にいわゆる牧ノ原期に対比されている。

国吉田台地（Ⅲb）

有度丘陵の北一北西麓に分布する台地状緩斜面のうち下位面に当るもので、先小鹿礫層、草薙泥層を不整合に覆う国吉田礫層（層厚15m+）の堆積面である。この国吉田面の形成期は、大井川下流の長者原面と同時期すなわち長者原期と考えられている。

なお有度丘陵地内には、以上の高・中位台地面以外に、小規模・断片的な低位の砂礫台地がある。

大井川低地 (IV a)

両図葉にまたがる大井川低地は、大井川の形成した「大井川扇状地」を主体に、その前方縁辺部分に当る「田尻低地」と、それらの北方にあって瀬戸川、朝比奈・葉梨川の形成した「瀬戸川流域低地」、「朝比奈川、葉梨川流域低地」および「朝比奈川上・中流谷底低地」とに分けることができる。なおこのほか住吉図葉内には、牧ノ原台地を刻む坂口谷川の谷底低地の谷口部分があるが、面積が狭いので便宜上これも大井川低地に含ませておく。

住吉図葉の過半を占め、静岡図葉の南西隅にまたがる「大井川扇状地」は、大井川の形成した典型的な扇状地地形であって、部分的に粘土層の薄層を挟むことはあるものの、ほぼ全域が厚い砂礫層からなり、全体の厚さは下流部では100mを越している。扇状地面は東ないし南東方向に4.5~2.5/1,000程度の傾斜を示すが、面上にはかつての洪水氾濫の痕跡を示す無数の浅い網目状乱流跡が認められる。それらは扇状地中央部分に密で、そこには名高い大井川平野の散村景観が開けるが、縁辺部では急に粗になり、集落も集村形態をとるようになる。

「田尻低地」はこの扇状地の東縁部に当るもので、その先端に駿河湾岸砂礫州に当る和田浜・宮島砂礫州がある。海拔高度はおおむね4~3mで、最低所は0.5m、構成物質も一般に砂礫・砂・泥の互層に変わっている。なおこの縁辺部付近には自然堤防状の微高地の発達が著しい。

「瀬戸川流域低地」のうちこの川の溪口部から海拔15mあたりまでは、小規模な扇状地地形(平均勾配は6~8/1,000)をなし、そこから下流へは主として右岸側に自然堤防状微高地の多い砂礫質の低地(表層の砂礫層の厚さ3~10m)を広げ、最下流部には先の砂礫州の背後に砂礫・砂・粘土の互層からなる低地を発達させている。なお瀬戸川の扇状地は大井川の堆積土砂量との力関係で、東から北に押しまげられた形をとっており、また瀬戸川の現河床は、その溪口部から築地付近まで、周辺の低地部より1~2mも高い天井川となっている。

上述の低地が砂礫質であったのに対し、つぎの「朝比奈川・葉梨川流域低地」は、そのほとんどが軟弱な泥質堆積物からなっていて、その溪口部にすら扇状地の発達がなく、現

在のおよび旧河道沿いの自然堤防部分以外はいずれも後背湿地性の低地をなしている。とりわけ潮山の東西両側と高草山山地の南縁部などの地では、河道から遠く隔っているため埋積が遅れ、この泥質堆積物の上に最厚10mにも達する泥炭や有機質土を発達させている。実際、潮山の周辺では一部に現在なお水草の生い茂る沼沢地を残しているし、また高崎～石脇下間の低地では、この有機質土の下部に沖積海進時の海成粘土層が20～50mもの厚さにも達していて、両図幅中でも最も地盤条件の悪い地域となっている。

「朝比奈川上・中流谷底低地」は、狭いながらも砂礫質の低地で、ここには小規模・断片的ながら二段の河岸段丘（うち中位段丘はさらに高低の二段に分れる）の発達をみる。

なお住吉図葉内にごく小面積分布する「坂口谷川低地」は、牧ノ原台地を開析する坂口谷川の谷底低地の一部であるが、この低地の出口は大井川扇状地と釘ヶ浦砂礫州とによって閉塞されているため、粘土・シルト層と泥炭・有機質土からなる軟弱な低湿地を形づくっている。

静岡低地（IVb）

静岡低地は安倍川の形成した「安倍川扇状地」を主体に、その東方および北東方向への連続部分に当る「高松低地」, 「麻機低地」の両三角州性低湿地, および「藁科川流域低地」と「丸子川・小坂川流域低地」の両谷底低地, さらに有度丘陵の周辺に発達する「有度丘陵西・北麓小扇状地」の六つの小地形単元に分けることができる。

「安倍川扇状地」では扇状地プロパーの部分は、賤機山地の先端に近い海拔35m付近から始まっており、したがってそれより上流の部分は安倍川の谷底低地に当たっているが、ここでは便宜上これも扇状地に含ませている。この地域はそのほぼ全域が厚い砂礫層からなっていて、扇面勾配は7～2/1,000と大井川のそれよりもやや大きな値を示している。右岸側の扇状地表面上には、既往の洪水跡を示す網目状乱流跡が認められるが（近年の耕地整備でかなりのものが消失）、いっぽう左岸側の静岡市街地部分では、人工改変の影響も加わって、こういった乱流跡を明らかにすることができない。

安倍川扇状地から高松・麻機両低地への境界は、ほぼ15～13mのコンターがそれに当るが、これから先でもなお自然堤防状の微高地が放射状に数本ほど張り出している。柳新田、千代田、古庄～長沼、小鹿、有東、石田に伸びる細長い微高地がそれらである。安倍川扇状地の東縁部がこういった複雑な平面形を呈すにいたったのは、静岡低地内に谷津山・八幡山・有東山の小山塊が島状に突出していて、扇状地の東方への拡大を分断してしまったか

らである。なお安倍川扇状地の形成に際してもう一つ重要な意味をもったものに賤機山地がある。この山列は安倍川と並行に真南に伸びているために、その先端を扇頂とする安倍川扇状地は、そこで360°近く回転して北に向けても扇面を広げている。このため地表面はここから麻機低地に向けて逆傾斜することになり、その先に浅畑沼とそれに続く低湿地とを残すことになったわけである。

この扇状地の北東に続く「麻機低地」は、表層に3~10mの有機質土、下部に厚い海成粘土層を有する三角州性の低湿地であって、静岡図葉内ではその分布は狭いが、北の清水図葉内にその主要部が広がっている。巴川の上流域に当るこの部分は、東方を先の長沼〜古庄の自然堤防状微高地と、北からきた長尾川の天井川の河道とによって閉塞されているため、全体としては浅い盆状を呈している。最低点は6m以下で、かつての浅畑沼の名残りは現在でも清水図葉内に認めることができる。

安倍川扇状地と有度丘陵との間に広がる「高松低地」は、麻機低地ほどではないが、それに近い低湿地で、表層には腐植に富んだ泥質層が広い面積を占めて分布している。登呂遺跡南方から大谷川河口にかけての低湿地部分は、臨海砂礫州の背後にあった潟の名残りである。なお巴川は、かつては上土・古庄から有度丘陵の西麓沿いを南下していたが、その後自然堤防状微高地の張り出しと、有度丘陵から小扇状地の押し出しとによつて、現在のような東方向への流路に変わったものと考えられている。

安倍川右岸の「藁科川流域低地」は、この川の形成した高燥な砂礫質の谷底低地である。なおこの低地に合流する小支谷のうちとくに朝比奈山地側のそれには、土石流状の堆積形の発達していることが多い。同じ安倍川の右岸に広がる「丸子川低地」は、中流部以上は砂礫質の谷底低地であるが、下流の谷の出口に当る部分は、安倍川扇状地によって閉塞されているため、厚い泥質層からなる軟弱な低湿地となっている。

「有度丘陵西・北麓小扇状地」は、つぎの清水低地に属する「有度丘陵東麓小扇状地」と共に、有度丘陵を開析する小流がつくった小扇状地群である。扇面勾配が大きく、その上に載る河道のかなりのものは天井川化していて、豪雨時にはしばしば氾濫する。

清水低地(Ⅳc)

静岡図葉の北東隅に位置する清水低地は、すでに述べた「有度丘陵東麓小扇状地」と「矢部・駒越海岸低地」、「清水砂堆地」、「宮加三臨海埋立地」の四つに区分することができるが、いずれも面積はごく狭い。

「清水砂堆地」は清水港西岸の低地を特色づける三列の砂堆地の一部で、そのうち北矢部のものはもっとも内陸側にあつて、もっとも古い砂堆列の南端部分に当り、海拔高度も9～5mと高い。村松から南に伸びるものは真中の列の一部で、海拔は5～3mほどである。もっとも外側でもっとも新しい砂堆列は、静岡図彙ではその北東端にごく一部が現われているにすぎないが、北方に向けては大きな広がりとなつて続いていく。

「矢部・駒越海岸低地」は、有度丘陵東麓の小扇状地とこの砂堆列との間を埋める低湿地であるが、表層の泥質層はそれほど厚いものではない。「宮加三埋立地」は、折戸湾内につくられた人工埋立地で、その成立はいずれも20世紀に入つてからである。

駿河湾岸砂礫州地 (IV d)

駿河湾に面した平野の臨海部には、砂・礫よりなる砂礫州の発達があつて、一部ではその上に風成砂を載せている。大井川低地では大井川河口右岸側に発達する「釘ヶ浦砂礫州」と、左岸側にあつて焼津市の大崩海岸まで伸びる「和田浜・宮島砂礫州」がそれに当り、静岡低地ではその前縁の「用宗・大浜砂礫州」がそれに当つている。

「釘ヶ浦砂礫州」は海拔2～5mで、数列からなり、堤間凹地は粘土・シルトからなる薄い湿地性堆積物で埋められている。また「和田浜・宮島砂礫州」は海拔1.5～5mで、その頂部には一般に風成砂を載せている。

「用宗・大浜砂礫州」は、一般には海拔5m前後であるが、宮竹では9m以上、用宗でも7m以上に高まり、安倍川河口左岸側では頂部に風成砂を載せている。なおこの砂礫州は有度丘陵南麓にも細長く伸びていて、東方で三保分岐砂礫州に続いている。

4 200~300

5 300~400

6 400~500

国 道 1 号

150号

高名高速道路

主要地方道 静岡・久能・清水線⑬

井川湖・御幸線⑭

静岡・春野・天竜線⑮

焼津・藤枝線⑯

藤枝・大井川線⑰

島田・吉田線⑱

藤枝・黒俣線㉔

焼津・榛原線㉕

1 級河川 安 倍 川

丸 子 川

藁 科 川

久 住 谷 川

飯 間 谷 川

新 間 谷 川

小 瀬 戸 谷 川

大 井 川

2 級河川 巴 川

大 沢 川

草 薙 川

吉 田 川

後 久 川

大 慈 悲 院 川

古 安 川

大谷川
 小鹿沢川
 浜川
 小坂川
 瀬戸川
 朝比奈川
 葉梨川
 岡部川
 谷川川
 野田沢川
 内瀬戸谷川
 小石川
 黒石川
 栃山川
 木屋川
 湯日川

(松本 繁樹
 北川 光雄
 浅黄谷剛寛)

<文献>

松本繁樹他(1971)：20万分ノ1地形分類図 一静岡県一 経済企画庁

門村 浩(1966)：静岡地域の地盤と防災上の問題点 静岡地域およびその周辺地域の防災上の諸問題(図共)一1965年度静岡県防災地学調査報告書 一 7~30

〃 (1967)：大井川下流部平野の土地条件と災害 大井川流域の防災地学上の諸問題(図共)一1966年度静岡県防災地学調査報告書 P43~87

土 隆一(1959)：日本平とその周辺の地形発達史 地理学評論 Vol.32. No.12

〃 ・松田磐余(1971)：地震被害の基礎条件としての地盤 静岡県地震対策基礎調査報告書一静岡・清水地域一 P35~51

静岡大学理学部地学教室(1973)：20万分ノ1 静岡県地質図, 静岡県

Ⅱ 表層地質図

総論

本図葉は静岡市および焼津市を中心とした区域で両市街地の間に古第三系からなる瀬戸川山地(400m-500m)と新第三系のアルカリ玄武岩からなる高草山山地(500m)が占める。高草山山地の南東側は駿河湾に急崖で臨み、大崩海岸の景勝として知られる。一方、静岡の南東には日本平(307m)、久能山で知られる有度丘陵が、これも海岸に面して位置する。静岡平野は安倍川河口の扇状地性平野、焼津平野は大井川河口扇状地の末端および瀬戸川・朝比奈川河口の三角洲性平野である。両平野には新第三系の静岡層群や大井川層群の小丘が沈降山地の特性を示して孤立突出する。

1 沖積平野(未固結堆積物)

沖積平野としては静岡平野の大部分、有度丘陵東側に清水平野の一部、大井川下流平野の一部である焼津平野が本図葉中に含まれる。

静岡平野は安倍川河口平野であるが多量の礫を供給する安倍川に由来するため、三角洲的扇状地の性格を持っている。したがって表層部は広い範囲にわたって河成礫層が分布する。しかし、主流の蔭になる丸子や小坂、長沼など、あるいは、側方末端にあたる大谷付近、賤機山の北東方末端などには泥層が分布している。このような条件は古くから続いていたようで、静岡市の中心部では100m以上に達する河成礫層が堆積し、小坂・丸子付近では泥層が30m以上にも達している。海岸一帯には強い沿岸流のため砂州と砂礫が発達し、砂質地盤がふちどっている。

有度丘陵東側の清水平野は基盤として洪積世の根古屋累層の波蝕台地があり、その上にうすく砂州と砂州間低湿地堆積物が分布し、丘陵東縁の旧海蝕崖付近には小扇状地がおおっている。有度丘陵の南側の旧海蝕崖前面の狭い海岸部にも谷の出口に砂礫からなる崖錐状の小扇状地が発達し、多くは天井川となっている。

大井川河口の扇状地性平野はその側方末端は焼津市街の南端付近に達し、それに北は瀬戸川や朝比奈川が中小河川であることと相俟って三角洲性の低平な平野にうつり変わっている。したがってこの付近の沖積層は泥層が厚く堆積し、現在や過去の河筋付近に砂礫層がはさまれている。海岸沿いには強い沿岸流のため砂質地盤が発達するが、礫の供給量の多い大井川の影響で多くは砂礫浜となっている。

以上は沖積平野をつくる堆積物の概要であるが、代表的な地域の層相を柱状図に示してある。

2 洪積層（未固結および半固結堆積物）

洪積層は大部分が有度丘陵に分布する。静岡平野、焼津平野の区域は最近地質時代の沈降域にあたるので段丘堆積物はこの図中の範囲にはほとんど見られない。また、あってもきわめて貧弱で地質時代も未詳である。

有度丘陵は地質断面図に見られるように、下位から根古屋（泥・礫）累層、礫層（久能山礫層）、泥層（草薙泥層）、礫層（小鹿礫層、国吉田礫層）というように泥層と礫層が交互に重なり合ってつくられ、礫層はいずれも洪積世の安倍川系河川に由来するもので、久能山礫層の堆積以来隆起をつづけ現在の丘陵の高さまで達した。しかし、東側と南側の山麓の半分近くを海蝕で失い、現在は山体の $\frac{1}{2}$ ～ $\frac{1}{4}$ が残ったものである。基盤の根古屋累層は洪積世初期、小鹿礫層は中位段丘堆積物に対比され、山頂では日本平の平坦面がその堆積面をあらわし、R-W間氷期の形成と考えられる。

3 新第三系（固結堆積物）

静岡平野に孤立する小丘群をつくる静岡層群、静岡市街に北から突出する賤機山と高草山山地をつくる竜爪層群、焼津平野西方の山地の1部をなす大井川層群がこれにあたる。竜爪層群は大部分がアルカリ玄武岩と粗面岩で、頁岩をはさみ、また、はんれい岩に貫入される。静岡層群と大井川層群はともに砂岩頁岩互層からなる。地質時代はいずれも中新世初期とされるが、三者の詳しい時代相互関係は未詳。

静岡層群と竜爪層群は衝上断層である糸魚川-静岡構造線で接し、竜爪層群と大井川層群は共に北西側は衝上断層-十枚山構造線で古第三系に接している。これらの衝上断層は左横ずれ成分が大きいので、付近の岩石は破砕性に富む。

4 古第三系（固結堆積物）

高草山山地の北西方に広く分布するのは古第三系で瀬戸川層群と呼ばれる。この図中には南部の一部が露出することになるが、石灰岩をはさみ、蛇紋岩に貫かれる砂岩および頁岩、砂岩および砂岩・頁岩互層からなっている。瀬戸川層群には剪断しゅう曲が普遍的で、破砕性に富む。

（土 隆一）

<参考文献>

- 鮫島輝彦・伊藤通玄(1972)：大崩海岸地域の地質，静大・地学研報，**3**(1)，1-6。
- 徳山 明(1972)：静岡地域の基盤地質構造の問題点(Ⅰ)，静大教育研報，(自然科学)，**(2)**，67-86。
- 土 隆一(1960)：有度山の地質構造ならびに地史，地質雑，**66**，251-262。
- 土 隆一(1971)：静岡・清水平野の地形・地質について，竹原記念論文集，183-189。
- 土 隆一編(1974)：20万分の1 静岡県地質図および静岡県の地質，154pp.，静岡県。

Ⅲ 土 壤 図

1 岩屑性土壌

(A)C断面をもつ土壌で、(A)層の発達はやや弱いが概して深い。一般に表層部は石礫質であるが、下層では泥質もしくは石礫質の末固結堆積物で占められている。これに属する土壌統は有度山2統で、有度山丘陵地斜面下部に分布し、主として天然広葉樹で占められている。

2 残積性未熟土壌

多少にかかわらず侵蝕の影響がみられる(A)C断面をもつ土壌である。腐植の滲潤が少なく、わずかに暗色を呈する(A)層の発達は弱く、かつ浅い。褐色、黄褐色および明黄褐色を呈するB C、C層よりなっているものが多い。これに属する土壌統は有度山1統と玉取1統で、有度山1統は有度山丘陵の残積面に分布し、主として天然アカマツ林に利用されている。玉取1統は本地域北西部の山地斜面に分布し、茶園・果樹園及び普通畑に利用されている。

3 砂丘未熟土壌

排水良好な海岸の砂丘地に分布し、土性は粒径のそろった中粒砂ないしは細粒砂からなる砂土で、(A)C断面をもつ未熟な土壌である。これに属する土壌統は、用宗1統、用宗2統、用宗3統及び浜新田1統である。そのうち用宗1統と2統は、静岡市、焼津市、大井川町、吉田町地内の駿河湾沿岸の砂丘地に分布し、海岸砂防林に利用されている。用宗1統は海岸線寄りに分布し、2統は内陸寄りにみとめられるが、1統は土壌層内への腐植の滲潤が少なく、円礫の混入度合が高い、特に用宗海岸ではこの傾向が強い。用宗3統は、裸地、荒地となっている。浜新田1統は海岸の防風林間などに分布し、普通畑に利用されている。

4 人工未熟土壌

これは本地域の場合、大型機械力を用いて山地の森林を開拓し、農地造成がおこなわれた際に、もとの土壌断面が破壊・攪乱されて、あたかも土壌化がすすまぬ未熟土壌のような土層断面形態がつくられた畑地土壌である。これに属するのは、玉取2統で、山地斜面に分布し、茶園、果樹園及び普通畑に利用されている。

5 黒ボク土壌

極暗褐色及び明度、彩度ともに2またはそれ以下の黒色の表層土(A層)が25cm以上50

cm未満の厚さをもつもので、腐植含量が高く、粗しょうなA層の下に、風化がすすみ、粘土分に富むち密な褐色ないし黄褐色のB層が存在する。静岡県東部の火山山麓に分布する黒ボク土とかなり類似した諸特徴をもっているが、粘土鉱物組成などが火山灰に由来する黒ボク土とは異なり、理化学的性質もそれにともなって若干異なっているため、現在火山灰を母材とする黒ボク土とは分類上区別して考えられている。これに属するものは、高草山1, 2統, 日本平統, 富厚里統及び草薙統で、このうち高草山1, 2統は玄武岩質の高草山山地斜面や山頂部に分布し、1統は主に天然広葉樹林や人工針葉樹林などに利用され2統は主に茶園, 果樹園, 普通畑に利用されている。日本平統と草薙統は、有度山丘陵の斜面に段丘上に分布し、前者は主に茶園, 果樹園, 普通畑及び花木栽培地に利用され、後者は主に天然広葉樹もしくはヒノキ人工林に利用されている。富厚里統は図幅北部に位置するダイヤボウ周辺の緩凸な尾根すじに分布し、ヒノキ人工林に利用されている、一般にA層はやや浅く、粘土質で石礫含量の多いB層に移行している。

また草薙統は有度山丘陵北部の山麓に分布し、天然広葉樹もしくはヒノキ人工林に利用されている。

黒色ないしは黒褐色のA層は平坦部では浸蝕によるためやや浅く、斜面の下部では再堆積によるためやや厚い。

6 乾性褐色森林土壌

湿潤温帯の森林植生下に発達するA, B, C層位配列を有する土壌である。この土壌は主として森林植物の落葉, 落枝とそれらの不完全分解物からなる粗腐植が、地表面にやや厚く堆積し、その下に黒褐色のA層と褐色ないしは淡褐色のB層があり、両者の推移はやや判然としている。B層上部には乾燥破碎によって発達した独特な土壌構造がみられる。これに属する土壌統は観音下1統および飯間1統で、観音下1統は朝比奈川中流部の右岸に分布し、飯間1統は薬科川流域と朝比奈川上流部に多く、いずれも尾根筋に分布し、主としてヒノキ人工林と天然広葉樹林として利用されている。

7 乾性褐色森林土壌（黄褐色）

乾性褐色森林土壌の分布地帯で、新第三紀の山地丘陵地や古第三紀のうち、起伏の小さい低山地の尾根すじや斜面上部にみられる土壌である。暗褐色ないしは褐色を呈し、弱度に発達したA層と一般に埴質かつ、堅密で10Y Rもしくは7.5Y Rの色相をもつ、明度、彩度の高いB層を有する。これに属する土壌統は谷津山1統, 宇津之谷1統で、前者は新第

三紀の丘陵地，後者は古第三紀低山地の南西斜面上部に多く，天然広葉樹林またはヒノキ人工林に利用されている。

8 褐色森林土壌

乾性褐色森林土壌と同様の森林帯にあるが，常に地中水分に富む斜面下部に多く現われ黒褐色を呈するボウ軟な厚いA層が発達し，その下部にある褐色のB層に漸変している。これに属する土壌統は観音下2統および飯間2統で，それぞれ観音下1統及び飯間1統と隣接した山腹および沢すじに現われ，主としてスギ人工林として利用されている。

9 褐色森林土壌（黄褐色系）

乾性褐色森林土壌（黄褐色系）の分布する森林地帯の斜面下部にみられる土壌である。A層は暗褐色ないしは褐色で発達が弱く，B，C層は埴質で，7.5Y～10YRの色相を有し，明度，彩度ともやや高い。これに属する土壌統は谷津山2統，宇津之谷2統で，谷津山2統は新第三紀の山地，丘陵地，宇津之谷2統は小起伏山地の斜面下部に分布し，主としてスギ人工林に利用されている。

10 赤色土壌

湿润気候の常緑広葉樹林下に生成された土壌で，うすい暗褐色のA層の下にくるB層は彩度，明度ともに高く，5YRまたはそれよりも赤い色相をもっている。一般にA層の腐植含量が低く，B層は粘土化がすすみ，埴質である。これに属する土壌統は，洪積世の温暖期に形成された玄武岩起源赤色風化殻を母材とする石脇統で，低い山地の緩傾斜面に分布し，主に果樹園，茶園に利用されている。

11 黄色土壌

湿润気候の常緑広葉樹林下に生成された土壌で，うすい暗褐色のA層の下にくるB層は5YRよりも黄色の色相をもつものである。一般にA層の腐植含量が低く，B層は粘土化がすすみ，埴質である。これに属する土壌統のうち，岡部1，2統は第三紀層の頁岩，砂岩風化物を母材とし，1統は山地の山頂部緩傾斜面に分布し，土壌体がうすく土層分化がやや不良なものである。2統は山地の凸型斜面上部に分布し，土層分化が比較的良材なものである。両者ともに果樹園，茶園，普通畑に利用されている。小丹原統は河岸段丘に分布し，主として茶園，普通畑に利用されている。藤枝2統は新第三紀層の泥岩，砂岩風化物を母材とし，高草山3統は玄武岩風化物を母材として山地斜面に分布し，主として果樹園茶園，普通畑に利用されている。有度山3統は，久能山礫層及びその上部の粘土質堆積物

層を母材とし、有度山丘陵斜面に分布し主として果樹園、茶園に利用されている。

12 暗赤色土壌

石灰岩または塩基性岩などを母材とする土壌で、5 Y Rの色相をもち、赤色土より明度、彩度とも低い土壌である。黒褐色のボウ軟なA層から暗赤褐のB層へ漸変する断面をもつ。これに属する土壌統は小坂1統、小坂2統および関谷統で、小坂統はアルカリ玄武岩が分布する、高草山、小坂、丸子地帯に出現し、1統は尾根すじに、2統は山腹から沢すじにみられ、主としてスギ、ヒノキの人工林として利用されている。また関谷統は石灰岩を母材とし、スギ人工林に利用されている。

13 細粒褐色低地土壌

比較的発達がすすまぬA層の下にやや粗しょうな黄灰～褐灰色を呈するB層をもち、土性が埴質の土壌である。これに属する土壌統は、吉田統と村良統で、前者は大井川沖積平野の一部に、後者は、粟梨川、朝比奈川沖積平野の一部に分布し、果樹園、茶園及び普通畑に利用されている。

14 褐色低地土壌

比較的発達がすすまぬA層の下にやや粗しょうな褐灰色を呈する中粒質のB層をもつ土壌である。これに属する土壌統は、上泉統と新島1統で、前者は断面下部が砂質となり、後者は砂礫層となり一般に排水良好である。大井川、瀬戸川及び安倍川などの河川の沖積平野に分布し、果樹園、茶園及び普通畑に利用されている。

15 粗粒褐色低地土壌

比較的発達がすすまぬ粗粒質のA層の下に、やや粗しょうな褐色、くらい灰黄色及び黒味をおびた褐色の粗粒質または砂礫質のB層をもつ土壌である。これに属する土壌統のうち、浜新田2統は海岸の砂丘砂を、瀬戸川統は砂礫質の自然堤防堆積物を、岡統は大井川扇状地末端部の粗粒質自然堤防堆積物を、小坂3統は山地谷間の粗粒堆積物を母材とするもので、主として茶園、果樹園及び普通畑に利用されている。

16 細粒灰色低地土壌

これは土性が細粒質で、土壌断面の色相は灰色を呈し、上・下層位に斑紋の存在がみられ、地表下80cm以内にグライ層が出現しないものである。これに属する土壌統は、高畑統、下小杉統及び惣右衛門統で、下小杉統は下層土の鉄斑紋集積層の下位にマンガン斑のかなりいちじるしい存在がみられる。惣右衛門統と高畑統は断面下部に砂礫層がくるが、前者

はそれが地表下50cm以内に出現し、後者はそれよりもやや深い。これらの土壌統は、大井川、安倍川沖積平野に分布し、水田に利用されているが、大井川扇状地に分布するものは圃場整備事業の際の機械力による天地がえしにより表層の土性が中粒～粗粒質から細粒質に変化したものがある。

17 中粒灰色低地土壌

これは土性が中粒質で、土層断面の色相は灰色を呈し、上、下層位に斑紋の存在がみられ、地表下80cm以内にグライ層が出現しないものである。これに属する土壌統は、中瀬統、善衛門上1統及び2統である。中瀬統は、断面下部の層位が粗粒質である。善衛門上1統は下層が細粒質で、地表下60～70cm位で砂礫層となる。善衛門上2統は、土壌が浅く、地表下20cm内外のところに砂礫層が出現するものである。大井川、安倍川及び巴川の沖積平野に分布し、水田に利用されている。

18 粗粒灰色低地土壌

これは土性が粗粒質で、土層断面の色相は灰色を呈し、上、下層位に斑紋の存在がみられ、地表下80cm以内にグライ層が出現しないものである。これに属する土壌統のうち、下江留統と西島統は地表下50cm以内に砂礫層が出現するもので、前者に比較し後者は一般に土壌が浅く地表下30cm以内に砂礫層が出現する。大井川、安倍川沖積平野に分布し、水田に利用されている。浜町統は大井川沖積平野末端部における海浜の砂を母材とするもので水田に利用されている。

19 細粒グライ土壌

これは土性が細粒質で、地表下80cm以内にグライ層が出現するものである。これに属する土壌統のうち、高新田統は土層断面の中間に砂層をはさみ、焼津統は断面下部の層位が粗粒質になっている。三郎兵衛新田統は、断面下部が暗青灰色を呈し粘着性がきわめて強い。九幡統は、断面内の比較的高い位置にグライ層が存在しするのに対し、朝比奈統はグライ層の存在する位置がかなり低く、前者に比べ地下水の影響がすくなくなっている。谷倉統は停滞水によるグライ化の影響の強いもので、築地統は下層に砂礫層が、高松統は下層に泥炭質層が存在するものである。大井川、瀬戸川、朝比奈川、葉梨川、安倍川及び藁科川などの河川流域の沖積平野に分布し、水田に利用されている。

20 粗粒グライ土壌

これは土性が粗粒質で、地表下80cm以内にグライ層が出現するものである。これに属す

る土壌統は飯淵統で、大井川冲積平野の一部に分布し、水田に利用されている。

21 泥炭土壌

表層から80cm以内に厚さ20cm以上の泥炭層をもつもので、これに属する土壌統は高田統で、葉梨川と朝比奈川の河流にかこまれ2つの小丘陵地間の低湿地に分布し、水田に利用されている。

(近藤鳴雄，縣富美夫，鈴木 正，加藤芳朗，浜田竜之介)

IV 傾斜区分図

静岡図葉では当然のことながら、山地、丘陵地、台地、低地で、それぞれ傾斜の分布を異にする。

図葉の西半に南北に続く高草山山地、安倍川山地は、海岸に直接しながら最高点がそれぞれ501m(高草山)、561mにまで高まる中・大起伏の堂々たる山地であるため、斜面の傾斜は大きく、その大半が S_5 ($20^\circ\sim 30^\circ$)もしくはそれ以上で占められ、逆に S_4 ($15^\circ\sim 20^\circ$)以下の斜面はごくわずか分布するにすぎない。とりわけ海岸に接して高く屹立する高草山山地では、 S_6 ($30^\circ\sim 40^\circ$)以上の急斜面が面積の半分近くを占め、この山地が駿河湾に終る大崩海岸では、 S_7 (40° 以上)の海蝕崖が連続して、「東海の親不知」とも呼ばれる奇勝をつくり出している。ここでは今なお大規模な崩壊の発生をみている。また北半の安倍川山地では、全体として傾斜はやや緩くなるが、 S_6 以上の急斜面は、山地内部よりも薬科川、朝比奈川沿いの谷壁斜面に帯状に分布し、山地斜面と谷底低地の境界の鋭さをよく現わしている。

賤機山地、谷津山も、小山塊ながら同様な急斜面を呈し、前者では山地全体が S_6 以上の急斜面をなしている。

有度丘陵地は最高点307m、南に急崖を向け北に緩斜した非対称丘陵地であるが、このうち南の崖は、厚い久能山礫層にできたもので、とりわけ free-faceの連続する S_7 の部分は、崖の並行後退的発達によって、屏風崖としての特色を長く保持し続けている。いっぽう北向きの斜面は、起伏量 $100\sim 200m/km^2$ の部分が $S_4\sim S_6$ ($15^\circ\sim 40^\circ$)で、同 $100m/km^2$ 以下の部分がほぼ S_3 ($8^\circ\sim 15^\circ$)となり、起伏量と斜面の傾斜との間にかかなりの対応が示される。またこの丘陵頂の日本平面、山麓の小鹿面、国吉田面などの台地面は、いずれも平滑な緩斜面であって、それらの傾斜は S_2 ($3^\circ\sim 8^\circ$)の範囲内に含まれる。なおこれらの台地をとりまく縁辺崖は、狭いながらも $S_6\sim S_7$ の急崖をなしている。

いっぽう低地部分の傾斜は、いずれも S_1 ($0^\circ\sim 3^\circ$)に当たっているが、ただ海岸線に平行に発達する砂礫州地では、その平均傾斜はそれよりも若干大きく、 S_2 程度とみられる。

住吉図葉では、その全体が大井川低地と沿岸砂礫州地で占められるため、その傾斜は S_1 、 S_2 のみであるが、この図葉の西端には、牧ノ原台地の末端部がわずかに顔をのぞかせているので、ごく小部分ながら S_7 の急崖が存在している。

(松本 繁樹)

(北川 光雄)

(浅黄谷剛寛)

V 水系・谷密度図

水系

静岡図葉内の水系は、大きく二つに分けられる。南～東流して駿河湾に直接流入する水系と、東流して清水の折戸湾に注ぐ水系とである。

前者のうちで最大の水系は、本図葉のほぼ中央を北から南に流れる安倍川（流路延長 50.8km）である。この安倍川は東海型の急流性荒れ川の典型であって、下流部といえども扇状地上を流下しているため、急勾配で、幅広い礫河原は河口まで続き、水流はその中を網状流しているにすぎない。安倍川の支流には、右岸側から合流する最大の薬科川（27.2 km）と、宇津ノ谷峠付近に発し、河口近くで安倍川に合流する丸子川（9.1 km）とがある。

本図葉の南西には、安倍川山地・志太山地を刻み、焼津市街地の北で駿河湾に流入する瀬戸川水系がある。本流の瀬戸川（26.4 km）と支流の薬梨川（11.0 km）、朝比奈川（21.2 km）とが合流する下流低地では、それらの流路の平面形は北に向けて張り出した形をとっている。この張り出しは、この低地形成時における流送土砂量の力関係を現わしているもので、南の優勢な大井川によって、これらの流路が北に押し曲げられたことを物語っている。なおこの付近の水系の単調なパターンは、軟弱で低湿な低地上の河川の特長をよく現わしている。そのほか直接駿河湾に流入する短小な低地河川として、黒石川（4.8 km、大井川低地）、小石川（2.2 km、同）、大谷川（2.0 km、同）などがあるが、これらの河川は排水河川としての性格が強い。

一方、後者の折戸湾に流入する水系には、麻畑沼に発する巴川（16.0 km）があり、北からの長尾川（8.9 km）と南の有度丘陵を刻む吉田川（3.6 km）、草薙川（3.0 km）、大沢川（4.1 km）などの支流を合わせて東流している。

住吉図葉では、水系はいずれも南東ないし東流し、直接駿河湾に流入している。大井川（160.2 km）が最大の水系であるが、本図葉にはその下流の一部が現われているのみである。安倍川の場合と同じく、扇状地上を流下するため、水流は河口まで続く幅広い礫河原の中を網状流している。そのほかほぼ大井川低地内のみ終始し、単調な平面形を示す小

河川として木屋川(10.0km)、栃山川(14.8km)と、人工的につくられた直線状の小流路とがある。なお住吉図葉の西端に顔を出す湯日川(12.3km)は、牧ノ原台地を刻む水系の downstream である。

谷密度

静岡図葉内の山地は、海岸に近接しながらも急傾斜で、大・中起伏の堂々たる山地をなすため、谷はいずれも深いV字谷をなし、その平面形もおおむね安定した樹枝状形を示している。安倍川山地、高草山山地では、谷密度はほぼ30~40/km²を示し、最大は49/km²に達するが、縁辺部では低地が入りこむため20台に下ってしまう。賤機山地、谷津山などは、山塊としての広がり狭いため、短小な谷の密度は10台程度にしかすぎない。

有度丘陵地では、南に急崖を向け、北に緩斜したこの丘陵の地形特性を反映して、南には短小な深い谷、北には長く浅い谷が伸びていて、南北で明瞭なパターンの違いをみせている。しかし丘陵地とはいっても、谷密度は30/km²以上と大きく、最大は46/km²に達するが、縁辺部では20台から10台にまで低下する。

住吉図葉をも含めた低地部では、谷密度の数字は主として水系そのものを数えたものであるため、その値は一般に10/km²以下となるが、水系網が密で、人工水路の発達しているところでは、それが10~20/km²を示すこともある。

(松本 繁樹)

(北川 光雄)

(浅黄谷剛寛)

Ⅵ 利水現況図

本地域は、年間平均降水量 2,200mm となっており、太平洋沿岸としては比較的雨量の少ない地域である。地域住民の水に対する関心も強く古くから、大規模な利水事業が実施されており、また現在も進められているが、その地域別の利水状況の概要は次のようである。

1 大井川左岸用水地域

本図葉の大井川町、焼津市、藤枝市の水田地域は大井川用水事業が昭和25年に計画される以前は、小規模な取水施設に依存していたが、大井川総合開発事業の一環として建設された中部電力株式会社の井川ダム及び井川発電所の放水を利用し、農業用水を統合取水し計画的な用水系統によって関係地域に導水し、水田を主とするかんがい用水である。

本事業は、国営事業（昭和43年度完了）県営事業（昭和47年度完了）及び団体営事業をもって実施した。

2 安倍川用水地域

本図葉の静岡市の水田地域は、安倍川用水事業が昭和38年、水利状態を改善するため静岡用水集水渠を延長して取水量の増加を図りかつ安倍川表流水にすることを目的に着手し昭和46年に完了している。

3 日本平及びその他地域

日本平地域は、静岡庵農業水利事業の受益地域にあり、水源は富士川から取水し発電を行なっている日本軽金属KKの放水路に求め齋原町高浜地先にポンプ5台の水源地場を設け導水し、みかん、茶、畑のかんがい、防除、施肥の多目的用水である。本事業は昭和48年度着手し国営事業（昭和52年度完了予定）県営事業（昭和57年度）及び団体営事業をもって実施中である。

また工業用水、上水道についても昭和41年度着手し、昭和50年度完了予定をもって静岡地区にも多量の供給が計画されている。

（白井 春雄）

Ⅶ 土地利用図

(農地)

本地域の北西部を占める藁科川，朝比奈川流域の河岸段丘と山地斜面及び東部の有度山丘陵の北西斜面下部に形成されている段丘上の農耕地は，茶園としての利用が多く，なかでも岡部町朝比奈地区は優秀な玉露茶の産地として全国的に知られている。果樹園（柑橘園）は上記の各地に分布しているが，ことに有度山丘陵の東側斜面や安倍川西岸の静岡市小坂地区，焼津市高草山南斜面，岡部町南部低山斜面及び藤枝市に属する丘陵地斜面は柑橘園としての利用が多い。沖積平野部の柑橘は主に朝比奈川沖積平野の一部と安倍川右岸の静岡市下河原地区とその南部の海岸近くに分布し安倍川沖積平野南部の砂地には桃園が分布し，大井川扇状地のうちで，藤枝市，大井川町に属する排水のよい地区には梨園が各所に分布している。本地域の各河川の沖積平野には水田が広く分布しているが，大井川扇状地の中心部をなす藤枝市，大井川町に属する水田地帯では，圃場整備事業によって従来の小区画圃場を整備して大型区画の圃場にまとめ，それとともに大型機械力を用いて表土あつかいや，深耕をおこない，また農道や用排水施設を整備して大型機械の導入を計るなど，農業生産性向上の基盤造成がおこなわれている。しかし，一方では沖積平野部の水田の果樹園，道路建設用地，住宅地，工場等事業用地及び養鰻池への転換がすすみ，ことに静岡市，焼津市の市街化区域内における農地（水田）の転用面積は，最近著しい増加をみせている。駿河湾に面する有度山丘陵南側の急傾斜面を利用したいわゆる“久能の石垣いちご”は全国的に有名である。海岸線に沿った海浜砂の沖積平地はビニールハウスなどによる集約的施設園芸が盛んで，イチゴ，キウリ，トマトの栽培がおこなわれている。また普通畑に利用されているところは，主に甘藷，落花生，そ菜栽培がおこなわれている。大井川扇状地のうち，排水のよいところは普通畑に利用され，ビニールハウスなどによる施設園芸も盛んで，イチゴ，トマト，キウリの栽培がおこなわれ，焼津市大島新田地区では菊栽培がおこなわれている。大井川扇状地の南端，海岸線に沿った砂丘背後の砂地地帯は普通畑に利用され甘藷，落花生，西瓜などの栽培がおこなわれ，前記の施設園芸もおこなわれている。この他，有度山丘陵北側斜面の下部の段丘上では茶園，普通畑の中でマツ，ツゲ，ヒバなどの庭園木栽培がおこなわれ，静岡県下では屈指の植木産地となっている。また，大井川扇状地南部の吉田町川尻を中心とする後背湿地帯は，養鰻池として利用され，

養殖鰻の産地として全国的に知られているが、最近、水田転換により大井川扇状地の中心部近くまで新規造成の養鰻池が分布するようになってきた。

(林 地)

本地域は、南西部の大井川河口周辺と東部日本平周辺までであり、ほぼ中央に安倍川が流れ、本地域の森林はおおよそ7,800haで調査区域の約25%に当たり、その分布は主として北西部藁科川及び朝比奈川流域に広がっている。この調査区域で挙げられる主要な山では北西部のたいらぼう海拔561mを最高峰とし、中央部に眺望のよい高草山海拔501mが位置している。

この地域の森林を現況により分けてみれば、朝比奈川上流と藁科川流域のスギ・ヒノキの人工林を主とした地域と果樹園や茶畑周辺に散在する比較的広葉樹の多い藤枝市岡部町南部の里山や日本平有度山(海307m)周辺の地域とに大別される。なお岡部町には、竹林が多く約300haに達することや、焼津市吉田町南部海岸線沿いに造成された人工松林が飛砂防備保安林として重要な役割を果たしていることが特筆される。

本地域の人工林率は高く、およそ67%となり人工林化は進んでいるが、これは植林保育に比較的容易な低山であることによると思われる。しかし林令についてみれば、人工林の半分以上が20年生以下で、戦後植栽されたものがほぼ7割を占め人工林第1代のもものが多く、将来林家の収入源として期待される。なお、この地域には国有林、県営林はない。

(近藤鳴雄, 白井真方)

1975年3月 印刷発行

志太開発地域

土地分類基本調査

静岡・住吉

編集発行 静岡県農地部農地企画課

静岡市追手町9番6号

印刷 株式会社 大村印刷所

静岡市常磐町2丁目12